

〇〇してみました世界のフィールド

知識はデータを情報化し、適切な判断に導く？

林 勲男 民博 文化資源研究センター



活火山に登ってみました

溶岩流の上に火山灰と噴石が降り積もっている

蓄積される過去の教訓やデータ。それらを活かし、適切な判断を導くためには、発信側のアクセス方法の整備だけでなく、受信側の心構えも必要のようだ。

日本では、どこへ行っても看板や標識にあふれている。ときにはそれが、景観を損ねたり、かえって混乱をもたらしたりすることもある。一方、そうした看板や標識による情報がなければ、自分で必要とする情報を集めるか、現場の状況から判断のよりどころとなる基本データを得なければならぬ。しかし、情報についても判断についても、それらの正確さを期することは容易なことではない。

火山の街・ラバウル

パプアニューギニアのニューブリテン島の東端に、ラバウルという人口七万人ほどの都市がある。日本では、首都のポート・モレスビー以上に、その名前は知られているだろう。太平洋戦争中に、ラバウル航空隊の基地があったことで、歌にもなった。このラバウル、じつは火山でも世界的に知られている。

空港からラバウル市街まではシンブソン湾に沿って車で一時間余りかかるが、この湾そのものが、およそ二五〇年前の火山噴火によってできた巨大なカルデラなのである。一九九四年には、湾岸にあるダブルブル火山とバルカン火山がほぼ同時に噴火し、ラバウル中心街の三分の一が火山灰に埋もれ、州都としての機能を失った。

噴火から二〇年後、わたしはパプアニューギニア国立博物館と共同で制作した防災教育用のビデオを持って、ラバウルのハイスクールを訪れた。その際に、ダブルブル山(海拔二二三メートル)は今では活動も沈静化し、誰でも短時間で登ることができるといので、ポート・モレスビーから同行した博物館の同僚と一緒に登ってみることにした。

パプアニューギニア
ニューブリテン島
ラバウル

近くの村まで行けば案内人がいるとホテルで聞いたので、まずはその村を訪ねた。火山までの陸路はなく、海路をとらなければならず、カヌーを手配することにした。一時間ほど待ってカヌーとこぎ手を確保し、三〇分足らずで火山の麓に上陸した。
村の案内人というのも結局はわからず、見つけたカヌーとそのこぎ手は、たまたま村にいてほかに用事もないので、こづかい稼ぎをしようかという程度だったようである。

火山の観測と情報

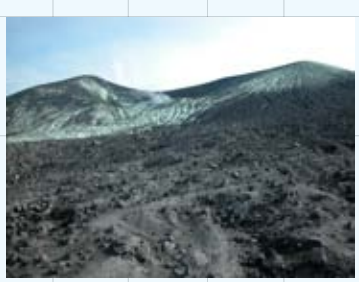
活火山の登山というと、多くの登山者が犠牲となった二〇一四年九月の御嶽山の噴火を思い出す。ちなみに、日本国内では活火山が一〇あり、そのうちの五〇の火山については、二四時間体制で観測・監視がおこなわれている。これら五〇の火山の四割が、「日本百名山」に選ばれた登山者に人気の山でもある。それだけに、観測データは、専門的な知識に基づいて情報化され、政府や地元自治体、さらには観光関係や登山関係施設へと伝えられる。今では、インターネット上でもそうしたデータや情報に、観光客や登山者が直接アクセスすることもできる。
さて我々のダブルブル登山であるが、結果からいえば、登頂を途中で断念して下山した。博物館の同僚が、火山性ガスの刺激臭で鼻と喉をやられて耐えきれず、山頂がどこかわからないままの撤退であった。

火山の街であるラバウルには火山観測所が存在する。一九九四年の噴火の際には、そこでの観測データに基づいて住民の迅速な避難がおこなわれ、死者は五名だけであった。

しかし我々の登山は、火山についての観測データも情報もまったくなかった。前々日にラバウル市内を見下ろす高台にある火山観測所を訪れ、持参した防災教育ビデオを寄贈していたのだが、そのときはまさか火山に登るとは考えてもいなかった。当時のダブルブル火山には、日本のように登山



噴煙をあげるダブルブル火山。写真左側からの陸路はなく、右側からの海路をとった



このあたりから火山性ガスがかなり鼻をつくようになり、引き返すことにした



子どもたちは「温泉たまご」をつくり、市場で売るそうだ

届を出すこともなく、道標も火山の状況を知らせる情報揭示も、道らしきものすらなかった。それから一週間ほど、同僚は咳き込み、わたしの目も充血していた。災害にかかわる情報には日ごろから気をつけるよう、防災教育教材にあらたな教訓を加えなければならぬようだ。